

国立科学博物館附属自然教育園と東京都庭園美術館の散策 (2024/10/22)

C 班 世話人

本企画は雨天予報により2度(3月と5月)の取り止めがあり、今回3度目の提案で実施できたものです。

仲間達14人が目黒駅に10:45に集合。今日の昼食はフリースタイルで、弁当とレストランからの自由選択でした。そのため、現地調達予定者にとっては、駅から自然教育園への徒歩9分は、レストランやコンビニをチェックしながらのゆっくりできない往路となりました。入園は、大人320円のところ、65才以上(&高校生以下)ということで無料でした。

自然教育園は、都内にありながら旧武蔵野の自然景観を残した広さ約20ha(東京ドーム4.2個分)あります。本園のパンフレットには次のように歴史が書かれています。

自然教育園の生い立ちは、今から400~500年前の豪族の館からはじまります。江戸時代は、高松藩主松平頼重の下屋敷となり、明治時代は陸・海軍の火薬庫、大正時代には白金御料地と歴史をかさねてきました。この間は、一般の人々が立ち入ることができなかったため、この地に豊かな自然が残されました。昭和24年(1949年)に天然記念物および史跡に指定され、一般に公開されるようになりました。

入口の建物は教育管理棟であり、自然教育園の自然を紹介した動・植物のはく製や写真が展示されています。ここで本園の概要を10分ほど学習して散策の開始です。予定コースは、ここから始まる路傍植物園、ひょうたん池、水生植物園、園の奥深くに通じる森の小径、武蔵野植物園、おろちの松、いもり池、水鳥の沼、館跡、そして教育管理棟への戻りです(ただ歩くだけなら40分程度)。散策路から外れて自然の中に踏み入ることはできません。



路傍植物園



イヌショウマ(犬升麻)

路傍には、日なたと日かげを好む野草類があり、たくさんのネームプレートが添えられていました。季節は秋であり、春に比べれば咲く花種類は少ないようでした。清楚に咲いている花名を覚えながら進んでいきます。5 歩ほど進んで同種の花に再会するも、今覚えただけの花名が思い出せません。ガックリ。周りの仲間もどうも同じようであり、「皆で渡れば怖くない」心境になりました。

池に倒れ込んで朽ちかけた木の上には、亀が甲羅干しをしていました。また、落葉が浮かぶ澄んだ湿地池をのぞき込むと、小さな小魚と川エビが遊んでいました。休憩したベンチの隣にタイアザミ（大薊）が咲いており、そこに大きなアオスジアゲハ（青条揚羽）が舞っていました。



タイアザミ（大薊）とアオスジアゲハ（青条揚羽）

園内奥深くに《大蛇（おろち）の松》がそそり立っていました。江戸時代の松平讃岐守の下屋敷のあった所で、この松はその頃に植えられたもので樹齢は 300 年、いつの頃からか「大蛇（おろち）の松」と呼ばれるようになったそうです。幹周約 4m 樹高 20m 弱、巨樹古木の多い園内にあっても群を抜いて存在感がありました（圧倒されて、写真を取り忘れました）。

園の出口（教育管理棟）近くまで心地よい疲れと共に戻ったところで、昼食解散です。弁当組 7 人はそのまま近くの休憩ベンチで昼食、残り 7 名は一足早く園を出てレストラン昼食です。次の集合は、隣接する東京都庭園美術館の出口近くとし 14:50 です。

昼食後は、その敷地が白金御料地から割譲された「東京都庭園美術館」の庭園の散策です。昭和初期のアールデコ建築「旧朝香宮邸」を活用した都立美術館で、建物とは別に次の3つのエリアからなる庭園があります。朝香宮邸(朝香宮夫妻が1906年に創立した宮家)時代から引き継がれ芝生が広がり開放感のある「芝庭」、起伏に富んだ景観と茶室で和の情緒にあふれる「日本庭園」、そしてベンチが配された寛ぎの空間で春にはワシントン桜が楽しめる「西洋庭園」です。今回は、庭園のみの散策で100円(65才以上)を払い、入園しました。



この季節、どの庭にも花は無く、人工的に整備された綺麗さは、午前中に訪れた自然教育園で味わった「自然の移り行くままできる限り自然の本来の姿」を際立たせるものでした。西洋庭園では、ブルーシートを広げ乳母車で集まった若いお母さんグループがいました。談笑したり、芝生の上で幼児たちとシャボン玉を飛ばしたり、よちよちと歩き回る幼児たちをフォローしていました。また、大の字になってずっとひっくり返っている若いカップルもなぜかいました。とても平和です。

弁当組はこの庭に置かれていた白いテーブルの一つに集まり、しばし休憩。そして、園の出口でレストラン組と合流し、15時前に解散。

今日の天気は晴れ一時曇り、特に暑くもなく寒くもなく快適な散策日和でした。お天道様と3度目の企画提案まで半年も待って参加してくれた仲間たちに大いに感謝する1日となりました。

